

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

働くとは、自分の役割を発見し、それに徹することである

自らの役割を発見することは、思いのほか難しいことです。しかし、発見する道筋は、とても簡単です。目の前のことを全力で臨むこと、どんなことでも決して逃げずに、全力で挑み続けること。それが道筋です。働くことは、自分の役割を発見すること、それまで、なぜ働くのかなど一度も考えたことのなかった若者にとって、突然開かれた人生の地平でした。

人間は誰かに喜ばれるために、生まれてくる。船井先生との会話のなかで至った、一つの答えです。こんなことがありました。

長男が三歳のときに肺炎を起こして入院しました。障がいのせいか、よく風邪をひいていましたから、さほど珍しいことではありません。同じ病室に、たいへん重い脳障害でまったく動けず、表情も変わらないように見える男の子もいました。健ちゃん、当時六歳。ある朝、出張前に病室を見舞ったときのことで。

「おはようございます。健ちゃんおはよう！」そう声をかけて病室に入った刹那、付き添いの母親が、「佐藤さん、おはようございます。あら、健ちゃん笑っている。健ちゃんは佐藤さんが大好きなのよね！」と言います。驚いて健ちゃんをのぞき込むと、私の目には、いつもと変わらず表情の固まった健ちゃんがいました。「健ちゃん、笑ってるんですか？」「佐藤さん、わかりませんか？健一は佐藤さんが病室にくると、いつもニコリするんですよ。ねえ、おばあちゃん」

「そうなんです。だから今朝も佐藤さんがくるといいねって話をしていたんです。」

健ちゃんにいつも付き添っている母親とおばあさんは笑顔でそう語りながら、健ちゃんの顔をなでていました。そのときに気づいたわけではありません。それから、幾日か経ち、人間は誰かに喜ばれるために生まれてきた、そう思うようになったのです。

たとえ、どんな重い障害があっても、その子は存在するだけで親や肉親の喜びの対象となっています。もちろん、悲しみが無いわけではありませんが、悲しみのなかで発見する小さな喜びは、ときとして計り知れない喜びや力へと転換してゆくのです。働く、その自分に課せられた役割。船井先生は入社後、私の運転する社長車なかで、窓外を見ながら、こう語ってくれました。

「世のため人のため、役に立つことをただ考えてごらん。いま、自分が面と向かっているその仕事で、どうすれば、役にたてるのか？」

先生は利益のために働く、予算のために働く、そう表現することは一度もありません。いまどう動けば、役に立てるのか？役に立てるその対象は、会社にとってではなく世のため人のために、そういつも語るのです。もちろん、ひいては会社のためになるに違いありません。だからこそ、最初の始点が大切だと思います。

“始点”をもっている人間は幸せです。何か迷ったとき、立ち戻る原点のことです。企業とか組織であれば、理念・方針です。一人の人間にとっても、この始点は大切です。始点がないと、人間はどこまでも思わぬ迷い道に落ち込んでしまうものです。私にとっての始点は、「役割」という言葉でした。自らのいまの役割は何か？

「何をすべきなのか？そのことをまず第一に考えることだよ」人間は、つい“何をしたいのか”に負けてしまいますが、船井先生はいますべきことを考える“クセづけ”をときに口にします。役割という言葉のなかに、先生の思想的エッセンスが満ちているのです。

“始点”とは何のことですか？

()